004 TICA

このところビーズをやる気がなく早めにベッドに入って本を沢山読みました。
殆どの本は子どもに学校で借りてきてもらってます。来年大学受験の娘の進学先に、
大きな図書館がある学校を薦めてます(^。^)

題名	著者	コメント	コメコメ
ドリーム バスター３ （徳間書店）	宮部みゆき	宮部みゆきの創作の世界はすごい。地球じゃないどこかで人間じゃない何かを創造し、その世界の規則、言葉、道具、宗教、生活、細部に渡る決めごとに至るまで、宮部みゆきは作り出す。ドリームバスターはブレイブストーリーよりも更に上をいく異種の世界。こんなに舞台作りのうまい作家はちょっといない。宮部みゆきの話の幅は広い。それなのに登場人物に一貫性を感じることが多い（ワンパターンってことじゃなくね）。それが感じられない『模倣犯』とか『誰か』が好きじゃないのかな。それにしてもこんなに間があく連載も珍しい。この vol. 3 が出たのは実に３年ぶり。それも今回もまたまた話が完結していない。困ったもんですじゃ。。（マエストロの話し方でした）	ジャンルを問わず、宮部みゆきの書く少年少女は厄介なほど健気だったり一本気だったりする。そこが好き。 ☆☆☆☆ またまた続いちゃったから減点。
エンドゲーム 常野物語 （集英社）	恩田陸	「裏返さ」なければ「裏返される」正体不明の「あれ」と戦い続けてきた親子の話。と書いてもなんだかわかんないでしょ。読んでもわかんない。常野物語シリーズでこれは第三弾だったみたい。だからって最初から読めば理解出来るとも思わないし、読む気もない。たいていは素敵な役どころの狂言回しも、それほどでもないし。	『夜ピク』だけで止めておいた方がよかった。 ★
おしゃべり用 心理ゲーム （角川文庫）	パキラハウス	軽いお遊びの心理ゲームがいくつも紹介されている。すぐに答えられる心理ゲームを何人かの友達にメールで送って、回答が来ると判定と照らし合わせて一人でけたけた笑ってた（悪趣味？^_^;）。この中のひとつのお話をタツオトさんに送って、それをなんとかＤＧ企画に出来ないものかと相談してるところ。っていうかタツオトさんに企画を丸投げしました。発表のときを気長に待ちます。	企画として発表された暁には☆５つとなる。 （タツオトさんにプレッシャーかけちゃったかな？）
熱球 （徳間書店）	重松清	３８歳のヨージは会社の縮小に伴い退職する。妻は単身留学中のためヨージが小学生の娘を連れて故郷に戻り父親との同居生活を始めるが、父子そろって閉鎖的な故郷の生活に馴染めないでいた。そんなときに高校時代の野球部の仲間と再会する。当時のチームは弱小チームだったが偶然もあり地区予選	この人の本は二冊め。 前と同じ印象の話でよかった。 どうやらこの人は好きみたい。 ☆☆☆★

		の準決勝まで行くが、事件が起こり決勝戦への出場が叶わなかった。そのことがヨージを故郷から遠ざけていた原因だった―。	
リビング （中央公論新社）	重松清	１２の短編の中に同じ夫婦の一年が四季毎に書かれ、その印象が強くて他の８編がさーっと流れていく。夫はファッション雑誌の編集者、妻はＣＧイラストレーターで＜趣味の共通する同世代夫婦、知識や教養やセンスのレベルもお互いかなりのレベルにいると自認する夫婦＞。…けっ！…そこまで言われちゃ、理想の家族像のために虚栄を張り空回りしている隣家の奥さんの方が可愛く見えるってもんだぃ。映画が好きという人がいたから自分も映画の話をしたくて話し始めたらまるっきり観ている映画の種類が違ったとがっかりする妻。気持ちはわからなくはないが、＜自認する夫婦＞は、シネスイッチやユーロスペースの場所がわからなくて『トイストーリー』や『もののけ姫』が面白いと言う人に溜息をつく。そして「トイストーリー」派の人は話の途中でも子どもを迎えに行き、その生き方の方が正しい人生なのかと妻は問う。。そんな人が側にいたら議論では負けるので「私は単館ものは見ないし、賞を取った本が好きです！」と言ってとっとこ逃げる。└（^__ˆ ）┐=3 =3 =3 =3 =3 =3 とっとこ	この人は好きみたいと油断してたらこれはだめ(>_<) つまらなかったと一言で終らせないように、わざと反感を買うような夫婦にしたのかと裏読みするくらい苦手な夫婦。 ☆
黒く塗れ ―髪結い伊三次捕り物余話―（文春文庫）	宇江佐真理	髪結いの本業の他に町方同心の下っ引きをつとめる伊三次と芸者のお文のシリーズ第５弾。二人には子どもが出来て伊三次の人間味がより一層現れて楽しく読める。時代小説にストーンズの題名をつけた意気込みはわかるけど、題名に合わせて話を作った感じがちょっとあったかな。でもいいゃ、伊三次さん、素敵だもん♡	伊三次さん 大好き！ ☆☆☆☆☆
東京タワー オカンと ボクと、時々、 オトン （扶桑社）	リリー・ フランキー	泣けるという評判の本でとっても読みやすい文章。なのに前半は読むのに時間がかかった。そのうえちっとも泣けなかった。私の感受性が鈍いのか、リリー・フランキーの顔が泣かせないのか。。でもオカンのように優しくて強くて子どもを信じている（信	ドラマでは田中裕子がオカンだった。私のイメージより若すぎ。 ☆☆☆★

		じていることすら意識していない）母親に私もなりたい。	
さくら （小学館）	西加奈子	どこでもヒーローになる兄、誰もが振り返るほどの美形の妹、明るい母親、物静かな父親、そして目立たない次男の立場が気に入っている主人公の薫。理想的な家族は時の流れとともに形を変えていく。事故で半身不随になった兄は自殺、妹は生まれたときからの記憶を持ち、その瞬間から兄を愛し続けるが愛情の持って行き方を間違える。母は異常に太り父は突然家を出る。妹の唯一の友人は妹を愛する同性愛者で父親の友人はオカマちゃん。 ひとくせあるキャラクターばかりでごちゃごちゃしすぎ。そんな人間の中で一人（一匹）すっきりとシンプルな犬の『さくら』がひたすら可愛い。『東京タワー』で泣かなかった鬼のようなあたしが『さくら』に泣いた。単に犬に弱いのです(･_･､)ﾎﾟﾛｯ	サーカスで芸をする犬がかわいそうで私は一生サーカスには行かない。 ☆☆☆★
告白 （中央公論新社）	町田康	どうせなら本屋大賞のベスト１０を読んでみようとどんなものか何も知らずに娘に学校で借りてきてもらったら、まぁ厚い！まぁ、意味不明！でもせっかく借りてきてもらったのに悪いから最初の方はちゃんと読んで、あとは最後だけをぱらぱら読みした。この本の評価が高いってことはあたしみたいな読み方をしない人が多いってことで、そこは素直に感心する。さすが本屋の店員さん。	頭を使う話は丸出ダメ子。 無星
天使のナイフ （講談社）	薬丸岳	第５１回乱歩賞。久しぶりの本格推理小説を読んだ。娘の目の前で惨殺された妻。犯人は１３歳の少年３人。４年後出所した少年が殺され、事件直後に少年たちを「殺したい」と発言した夫は疑惑の人となる。このまま息苦しく話は進んでいくのかと深呼吸していたら２人目の殺人で新たな展開となり、犯人探しにぐんぐん惹きこまれた。 少年たちの生活を知りたがる夫は、やがて妻の過去を知ることとなる。犯人が逮捕された後に、少年法の蔭に隠されていた事件も暴かれて、知る事と知らない事以上に知らなければいけない事もあるよなぁと朝方までかかって一気に読みきった後の思いでした。	犯人の目星をつけながら読んでいたら容疑者が３人もいた。探偵にはなれない。 ☆☆☆☆

クローズド・ノート（角川書店）	雫井脩介	女子大生が住むアパートの部屋で、前の居住者が置き忘れたノートの束を見つける。そのノートは小学校の教師となったばかりの女性の日記だった。オチはとっくに見えていて意外性もなく終る。最後が解かっていても面白いっていうのでもなかった。 『栄光一途』といい雫井脩介が書く女の人があたしは好きじゃないみたい。『犯人に告ぐ』みたいな刑事が主役のかっこいい話が読みたい。	すっごく楽しみにして単行本を買ったんだぞ！（ブックオフだけど） 無星！ (￣^￣)
ハサミ男（講談社文庫）	殊能将之	トヨエツが主役で映画化になっていたので買ってみた。トヨエツはハサミ男だと思って読んでいたらまるでタイプが違い、後に出てきたサイコアナリストがぴったりで、この役だったのかと納得した。読み終わってこれの映画化は無理だとわかった。無理なのに映画にするから趣味の悪い題名の意味からして違うものになってしまう。ここまで話を変えちゃうとただの猟奇殺人になってしまって面白さがどこにもない。 あとで映画のサイトに行ってみたら、ハサミ男がやっぱりトヨエツでびーっくりした。	ハサミ男の手口を真似て殺された犠牲者の第一発見者にハサミ男がなるのはいくら偶然の必然を説明されてもやりすぎかなぁ。 ☆☆☆☆
ふたたびの恋（文芸春秋）	野沢尚	野沢尚が自殺するぎりぎりまで書いていたというプロットが最後に載っていてそれが読みたかった。絶筆かと思ったらストーリーは完成していて、あとは取材で固めるだけというところまで出来ていた。	電車の中では恥ずかしくてちょっと読めない題名です。☆
優しい子よ（講談社）	大崎善生	大病を患っている１０歳の男の子との手紙の交流、プロデューサー萩元晴彦の生と死。女流棋士の妻との日常生活の４編。私小説だと思って読んでいたら小説だと思ってもらいたいような作者のあとがき。物語としては淡々としすぎているので、私小説として読んだ方が納得するんだけどな。	漫画で読んだ「聖の青春」の原作者だとは知らなかった。 ☆☆
リアルワールド（集英社）	桐野夏生	高校三年の夏、十四子の隣家の男子高校生が母親を殺して逃走。十四子のグループ４人が、遊び半分でその逃走に関わっていくがその結末は取り返しのつかないものとなる。ふたつの名前を使い世間と距離をおく十四子、女の人しか愛せないユウザン、遊んでいる事を知られていないと思ってるキラリン、「年若い超哲学的人間」のテラウチの四人の少女の	今、娘が１８になって、親子関係がうまくいってるとか、こんな親で随分楽でしょと思ってるのは親だけなのかも。

		自分だけの世界、他人との関わり方に、色々な事が解かり始めて全てを解かってると思い込んでしまう１８の切なさを思う。十四子が最後に仮面を捨て自分ひとりで抱えていく決意をすることがこの少女をどんなおとなにするのかとふと考えてしまう。	☆☆

2006年本屋大賞

本屋さんの店員が選ぶこの大賞、投票者は若いイメージ。

泣ける小説が流行の現象は年代問わないってのは、みんな感動したいってことなのね。

大賞	東京タワー オカンとボクと、時々、オトン	リリー・フランキー
２位	サウスバウンド	奥田英朗
３位	死神の精度	伊坂幸太郎
４位	容疑者Ｘの献身	東野圭吾
５位	その日のまえに	重松清
６位	ナラタージュ	島本理生
７位	告白	町田康
８位	ベルカ、吠えないのか？	古川日出男
９位	県庁の星	桂望実
１０位	さくら	西加奈子
１１位	魔王	伊坂幸太郎

黒色にした未読の『ナラタージュ』『ベルカ・・』『県庁の星』はこの先も読まないなぁ。。

私の『本屋大賞』

大賞	その日のまえに	重松清	読者としての重松清デビューの本。高校生の男の子の話はずっと忘れない。まぁ、年をとったってこともあるけど本を読んでこれほど泣いたのは初めて。母親と息子の話は『東京タワー』も同じだけど、リリー・フランキーよりこっちの親子のが断然いい。現実と小説だから？それともリリー・フランキーの顔のせい？んー、自分が母親側になって読んでるからかな。あんなおぢさんが息子なんて嫌だもんね。
２位	死神の精度	伊坂幸太郎	今をときめく伊坂幸太郎デビューだったので力を入れてページをめくったが、力まずとも読めて新

			鮮で面白かった（ドラマ『僕の歩く道』が大好きで、面白い！とＣＡＣＣＯに言ったら、面白さは認めながらもこの話は韓国映画にあると言われた。物知らずだと何事も新鮮に映るのかもしれない)。こっちを『私の大賞』にした方が今っぽくてかっこいいと見栄を張ろうかと思ったけど、ちょいと淡々としすぎて大賞には軽い感じかな。
３位	さくら	西加奈子	この人も読むのは初めてで西加奈子デビューだったんだけど、なんの先入観もなく読んだ。健気で可愛い犬のさくらが死ななくてほんとによかった。これで死んでたらビリにしちゃうもんね。
４位	東京タワー	リリー・フランキー	リストの☆の数は『さくら』と同じでもランクは下。期待度ってことかな。☆５個の予定で読んでたからね。
５位	容疑者Ｘの献身	東野圭吾	一風変わった推理小説。すっかりベテランと呼ばれる位置になった東野圭吾がベスト１０入りしたのは嬉しい。ただこの【献身】ってのは照れるね（何もあたしが照れるこたないが)。これも泣けるって評判だったけど、このくらいじゃあたしは泣かない。泣くどころか、この愛情の在り方が純愛と言われているのが怖くない？と思ってしまった。ひねくれてる？いいぇ、健ちゃんほどでは。。
６位	サウスバウンド	奥田英朗	団塊の世代の父親の話が受け入れられたのが意外に思っていたら、若い読者は息子に共鳴してるのかとはたと気がついた。
７位	魔王	伊坂幸太郎	どこが面白いのかよくわからなかった。。でも他の本の登場人物がちょこちょこ現れて、そういうとこが伊坂ファンにはたまらないってのは解かる。
８位	告白	町田康	私の頭ではお手上げです。ぴーぴーがーがー… あっ、壊れましたぁ。。

読書感想文が小さな頃から苦手だったのに、何を思ったかグリコとＣＡＣＣＯと、本のことを話せる場を作ろうと始めたＤＧ。読んだ本の記録として、なんて軽い気持ちだった。苦手は今も変わらず、一冊でもちゃんとした感想を書いてある読書リストを読むと素晴らしいなぁと思う。私は作者の意図を汲み取ることも掘り下げることも出来ない感覚人間。上っ面なんです。そのうえ取り止めもなく無駄に長いんです。これからもずっとそうです。開き直りです。うぅっ。･゜゜･(>_<;)･゜゜･。